



イラクを訪ねて (2)

埴 輝 雄*

3. イラクの大学

今回は旅行案内を中断してイラクにおける大学の理工系学部の状況を紹介することにしよう。イラクにはバグダード大学を筆頭としてモースル、バスラ、スレイマニアの四総合大学がありバグダードには更に工科大学、文科系のムスタンスリア大学等がある。筆者はスレイマニア、ムスタンスリア両大学を除いた各大学を訪問して実情に触れる機会があった。しかし英文の大学案内がほとんど手に入らなかったの以下に述べることは見聞を総合したものである。

学制は小学校6年、中学校5年、大学4年(最近5年から4年に変わった)となっており、大学への入学は資格試験制となっている。ただし寄宿舎は未だ不十分で都会は例外なしに住宅難であるから、学生は原則として自宅通学可能な大学に割当てられる。大学間にはもちろん格差が存在し、優秀な学生は地方からでもバグダード大学に入学することが出来る。イラクは社会主義体制下であり、教育を重視していることもあって、一切の教育費は国庫負担となっており、教科書も貸与され、大学生には若干の学費が給付されている。当然、学生は卒業後1~2年間、政府機関または軍隊に対するサービスが要求される。

大学は2セメスター制をとり、第1セメスターは9月末から1月末までで、最後の2週間が試験期間となっている。1週間の休みの後第2セメスターが始まり、6月中旬に至る。もちろん最後の2週間は試験で、卒業式は6月末に行われる。

次にバ大電気工学科を例にとってカリキュラ

ムの概要を紹介しよう。1975年当時は5年制で、最初の1年は一般課目をカレッジに付属した一般課程科で履修し、その後専門課程に入る。5年生になると電力工学コースと電子、通信コースに分けられることになっていた。現在は4年制に短縮され、総単位数は従来の206から191に減少している。1年短縮しても単位数の減少が15に止まっているのは1日の講義時間を延長したことによるが、実にこれは大変な変革なのである。イラクでは大学も官庁も始業時刻は午前8時、終業は2時で、昼食は自宅へ帰ってからとるのが習慣であった。従って、バ大工学部には食堂がなかった。ところが77年に訪問したときは食堂に案内され、時間割が5時まで延長されたことを知らされたのである。ただし他の官庁もそうなったかどうかわからない。なお、回教国では金曜日が休日、木曜日は正午までとなっている。

電気工学科に関して言えば、電子工学は軍事および工業化政策の基本として最も重視され、かなり多数の学生が送り込まれている。例えばバグダード大学では1975年度においては、1年生170、2年生120、3年生90、4年生70、5年生60名の学生を持ち、更に次年度は学生が増加する見込みであると言っていた。この500名を超える学生に対し教官は当時18名しか無く学生対教官比は30対1に近いものであった。この比はバスラ大学、モースル大学の順に悪化し、モースル大学では50対1に近いものであった。当然教官の講義負担は重く、ノルマは週20時間以上であった。その後学生数の削減と教官数の僅かな増加があり、77年では講義ノルマは週15時間まで減少した(バ大、電気工学科)。といっても、わが国とは比較にならないほど教育負担は重い。その上あらゆる装置から小部品に至るまですべて輸入に頼らねばならず、破損したと

* 埴 輝雄 Teruo HANAWA 大阪大学工学部、電子ビーム研究施設科、教授、理学博士、電子工学

きの修理も長時間を要する。このような状態では実験的研究はほとんど絶望的であることが理解されるであろう。教官側に比して学生に対する実験設備はかなり充実しており、むしろわが国の大学より質量ともに勝れている面もある。

イラクの大学においては外人教師の占める割合は高く、モースル大学の電気工学科では13名のスタッフ中イラク人は2名でほかはエジプト、インド人であった。この両国人は大学以外にもかなり進出していることが認められる。バグダード大学はさすがに外人は少なく、電気工学科では現在0である。ここで一つのエピソードを語らねばならない。筆者がバスラ大学の電気工学科を訪問をしたとき“先生”と呼ぶ人物が現われてビックリした。よくみると1968年頃阪大電気工学科に留学していたラヒーム君（西パキスタン出身）であった。彼はインストラクターとしてこの地で働いていたのである。しばし世界の狭さを感じていると彼は“実は頼みがあるので聞いてくれないか”と切り出した。何事かと思ったら、“ラヒームという男は非常に優秀な人物であるから是非給料を上げるよう”学科主任に推薦してほしいとのことであった。まことに要領のよい男である。さて、イラク人の教師はほとんど英国に留学し Ph. D を得ており、現在も多数（200名くらいと聞いた）の学生が修士、博士課程修得のため英国に派遣されている。大学の制度も英国式を踏襲しており、英国の影響力の大きさは測りしれないのを感じた。

社会主義体制下では教官はさぞ窮屈な制約を



ラヒーム君（右端）と学生
（バスラ大学電気工学教室）

受けているに違いないと予想していた。確かにそのような面があるとは感じられるが実体はよくわからない。興味を惹いた点は大学教官に副業が認められていることであった。副業をすれば俸給の一部は削減されるが、かなり多くの先生方が夕方から夜にかけてコンサルタント業に精を出していることを見た。人材が少ない発展途上国においてはこのようなことは止むを得ない面があると思われる。ひるがえってわが国のことを考えれば、明治時代は実業家は国家のため金をもうけ、帝国大学教授はエリート中のエリートとして非常な特権を享受していたはずである。イラクでも大学の教官（ほとんど講師、助教授までで教授はほとんどいない）はかなり優遇され、円に換算するとほぼわが国と同程度の月給をもらっている。問題は購買力であるが、食料品を含む生活必需品は安く、自動車や電化製品はかなり割高である。例えば自動車はすべて輸入品であるため、最低クラスでも100%の税金が掛けられている。高級車ほど税金は高いが、バグダード大学には数十台のベンツが駐車していることを見た。一時期教官に対して自動車税を免除したことがあり、そのとき争って買入れたのだそうである。ガソリンは75年の時点で38円/lであった。住宅については、何人かの先生方の自宅を訪問する機会があり、日本と比較することが出来た。インフレが進行しているので現在の事情はわからないが75年当時、土地価格は標準的な場所で1m²当り1.5万円、建築費は1m²り6~7万円程度と聞いた。敷地面積は500~600m²、家屋は100m²以上で、芝生と植木、花壇のある広い前庭を持つのが標準的な中流以上の住宅である。乾燥地帯であるから庭の緑を維持するため毎日多量の散水が必要とする。水源はもちろんチグリス河であるが、ちゃんと雑用水、上水と2系統の水道が敷設されているのは立派なものである。夕方の食事やパーティーは必ずこの庭で行われ、レストランやナイトクラブでも屋外の席が好まれるのである。確かに、春から秋にかけては陽が沈めば屋外の方が快適で、室内はムツとする暑さである。ではクーラーは無いのか？と聞かれそうである。確かにコンプレッサー式のクーラ

一般家庭には無いといってよい。しかしこの地には独特の冷房装置が広く普及しているのである。それは水の気化熱を利用するもので、椰子の皮の繊維で作ったネットを何段か重ね、それに水を注ぎ掛けながら送風器を運転し、ネットを通過した空気をダクトで室内に導くのである。この簡単な装置は驚くべき威力を発揮し、まことに快適であることを体験した。日本でこの機械を運転したら、ろくに冷えないで室内はカビだらけになることは間違いない。同じように素焼きの壺に入った水の冷たさは日本ではとても想像出来ないほどであった。やや脱線したが再び大学に話を戻すことにしよう。

学生に関してまず目につくことは文科系はもちろん理・工科系に至るまで女子学生の数が多いことで、機械や土木工学科でも例外ではない。正確にはわからないが全学生の2割程度ではないかと思われる。1975年当時はこれら多数の女子学生が色とりどりの華やかな装いを身につけ、キャンパスは花ざかりといった状況であった。ただし、回教徒の女子学生はスカーフを頭からかぶり、地味なコートで身を包んではい

たが、それはそれでまた趣のある姿であった。ところが、2年経って再びバグダード大学を訪ねたときはキャンパスから華やかさは幻のごとく消え去っていた。制服が導入され、男子はグレーのズボンと白シャツ、女子はグレーのスカートと白いブラウスに統一されてしまったからである。

講義はもちろんアラビア語で行われているが、学生の英語水準は高く、英語の講義に対してはなんの抵抗もない。講義や一般講演を行って感じたことは、われわれ日本人は声が小さいことである。これに反してアラビア語はまことに響きの強い言葉で、われわれ湿度の高い風土で育った人間のノドとアラブ人のノドとでは本質的な差があるのではないかとすら思える。とも角、発展途上国に行って講義をしようとする人は大声で英語が話せる人でなければならぬと感じた。マイクは使えないと思えば間違いはない。スライドプロジェクターがあってもスクリーンや暗幕が無いことも多い。8mm映画は、使えば非常に効果的であるが、映写機の有無を予め確認しておかねばならない。バグダードと



バグダード大学工学部

比べるとモースルやバスラは人口はもちろん、すべての点で大きな格差があり、そのような都市に住む教官にとっては、異国人の講演を聞くことは楽しみの一つでもあることを覚った。私どもは英語の語彙を出来るだけ豊かにして、プロフェッサーに対する期待を余り破りたくないものと思う。

さて大学院に話題を移そう。各カレッジによって事情は異なるので以下に述べるのは電気工学科に関するものである。バグダード大学では1971年、他大学（モースル、バスラ、工科大学）では1975年マスターコースが開設されたが、コース数、学生数ともにまだ非常に少ない。バグダード大学では近い将来、固体電子工学、コンピューター、高電圧工学、システムと制御の四つのコースを開設する計画を持っているが、そのうち、高電圧工学に関しては東ドイツの援助により実験室の建設が行われていた。また興味を惹いたのは Higher Diploma なる制度を最近発足させたことである。これは学部卒業後1年間24単位のコースを取得した者に与えられ、良い成績を挙げた者は更に1年の講義をうけてマスターの学位を得ることが出来る。

というものである。ただし固体電子工学は適用対象外となるとのことであった。

最後に教育協力について触れておくことにしよう。イラクの各大学は教官不足に悩んでおり、わが国に対する援助の期待は非常に大きなものがあった。筆者がイラクを訪ねるようになった背景にはわが国とのコンタクトを密にしたいと意図があったことは確かである。交渉は個人間のペースで進み、ごく短期間で訪問が実現した。日本では個人より組織が優先するが、アラブでは全く逆なのである。またこの事情は中国も同じで、むしろ日本的な組織感覚の方が特殊なのではないかと思う。この彼我の組織に対する感覚の差は事あるごとに誤解の種となっているように思われるので注意が必要である。

具体的な問題として教官を派遣する場合、6週間程度で1単位、30時間の講義ならびに試験を行うのが標準的スケジュールで、交換の場合は1 Semesterが希望された。また夏休み期間にイラクから教官を研修のため派遣したいとの申込みもあった。いずれにせよ容易な道から交流を実現して行きたいものと思う。